

「ミレーから印象派への流れ展」

横浜そごう美術館

2020. 12. 19～2021. 01. 24

本展は、自然主義や写実主義に始まり、印象派やポスト印象派を経てナビ派へと至る19世紀フランス絵画の系譜を、フランスとイギリスの美術館から出展された作品から紹介する企画展である。パリ郊外のバルビゾン村に移り住んだバルビゾン派の画家は、歴史が絵画の正統とされていた時代にあって、“風景や田園生活といった身近な題材をありのままに描くこと”を試みた。

その代表的画家である「ジャン＝フランソワ・ミレー」は、大地に根付いた農民の暮らしを描き、本展では、ミレーの《冬、薪集め》《慈愛》や、同じくバルビゾン派の独りであった「ジャン＝バティスト・カミーユ・コロー」や写実主義の画家「ギュスターブ・クールベ」らの作品が展示されている。

風景を写實的に描いた「バルビゾン」画家の試みは、“光や色彩を追求した印象派画家”へと継承され、「クロード・モネ」の代表作《睡蓮》などの印象派絵画や、「ポール・セザンヌ」の《プロヴァンスの風景》といったポスト印象派の作品を展示するとともに、「モーリス・ドニ」や「ピエール・ボナール」らのナビ派の作品から、フランス絵画の多彩な展開をたどる企画である。

ジャン＝フランソワ・ミレー 《冬、薪集め》1868～75年



牛の門と言われるバルビゾン村の入り口で、酷い頭痛に悩まされていた画伯が復調することなく未完に終わった時代の絵画作品である。

村に移住した時に感銘を受けたのは、落穂拾いと薪拾いをする貧しい農婦の姿で、一家の最長老女性か集落の最も貧しい人々の仕事であった。

我が身を燃やして他人を温める薪と、思い荷を背負う女性達が受難を象徴していると思われる。

カミーユ・コロー 《カステル・ガンドルフォ、アルバーノ湖畔で踊るチロルの羊飼い》1855～60年



画伯の自然を題材にした風景作品は、概して牧歌的な調和に満ちていて、数多くの画家たちに多大の影響を与えたとされている。

本作品の前景の大きな木々は、画伯が好んで用いる構図で、枝の間からいくつかの建物が見え、前方には穏やかな水面が見え、二人の人物を描き入れることも特徴である。